

## 「同じ過ちを繰り返さないために」

先週の母の日、私達はルツ記よりルツとナオミの生涯を見、その二人の女性に神様は御目を注いでおられることを確認しました。またその前の週には大祭司であったエリの二人の息子達の宮に対する悪事ゆえに彼らが継ぐべきはたらきがサムエルに委ねられるようになったとお話しました。しかしながら、国民の尊敬を受けていたこのサムエルの息子達も同様な問題をもっており、サムエルの跡を継ぐことができず、民は彼のもとにきて『今、ほかの国々のように、われわれをさばく王を、われわれのために立ててください』（サムエル記上8章5節）と願ったということをお話ししました。

そして、サムエルはこの民の言葉を神様に告げ、それに対して神様は『7「民がすべてあなたに言う所の声に聞き従いなさい。彼らが捨てるのはあなたではなく、わたしを捨てて、彼らの上にわたしが王であることを認めないのである』（サムエル上8章7節-8節）と答え、サムエルは民に向かって「本当にそれでいいのか」と念を押すように、王が立てられた後のイスラエルがどうなっていくのかということを用意こう語りかけました。

11「あなたがたを治める王のならわしは次のとおりである。彼はあなたがたのむすこを取って、戦車隊に入れ、騎兵とし、自分の戦車の前に走らせるであろう。12彼はまたそれを千人の長、五十人の長に任じ、またその地を耕させ、その作物を刈らせ、またその武器と戦車の装備を造らせるであろう。13 また、あなたがたの娘を取って、香をつくる者とし、料理をする者とし、パンを焼く者とするであろう。14 また、あなたがたの畑とぶどう畑とオリーブ畑の最も良い物を取って、その家来に与え、15 あなたがたの穀物と、ぶどう畑の、十分の一を取って、その役人と家来に与え、16 また、あなたがたの男女の奴隷および、あなたがたの最も良い牛とろばを取って、自分のために働かせ、17 また、あなたがたの羊の十分の一を取り、あなたがたは、その奴隷となるであろう。18 そしてその日あなたがたは自分のために選んだ王のゆえに呼ばれるであろう。しかし主はその日にあなたがたに答えられないであろう」（サムエル上8章11節-18節）。

主にある皆さん、サムエルはそれまで王を立てたことがないイスラエルの民に対して、彼らを王が統治するようになった場合、どんなことが起こるかということをお話したのです。そう、王はまず自らの周りに軍隊をおき、民をその兵役に就かせ、自分の戦車の前に走らせる、すなわち王のために彼らは命を犠牲にしなければならなくなり、また彼らの娘達は王の前に働く者となり、また王には決まったものを捧げることになるだろうということです。これは民衆の自由を奪うような横暴な支配、また有無を言わせない重税を指しているのでしょうか。そして果てには彼らは王の奴隷

のような有様となり、その時になって彼らが神を求めても神はあなたがたに答えられないというのです。

しかし、サムエルのこの忠告を聞いたイスラエルの民はその言葉を拒み、言いました『19「いいえ、われわれを治める王がなければならない。20われわれも他の国々のようになり、王がわれわれをさばき、われわれを率いて、われわれの戦いにたたかうのである」（サムエル上8章19節-21節）。そしてこのことに対して神様はサムエルに言うのです「彼らの声に従い、彼らのために王を立てよ」（サムエル上8章22節）。

こうしてサムエルはその名をサウルというその齡、三十となる男に油を注ぎます。「油を注ぐ」ということは当時、王や祭司の任職の際になされていた神様から直々に指示されていた儀式で、これによりサウルはイスラエルの初代の王となりました。

私達は今、神様から託されている各々の人生を生きています。その中であって、自ら滅んでもいいと願う人はいませんでしょう。できることなら神の御心に従って生きたいと私達は願うことでしょう。ではどうしたらそのことが可能なのでしょうか。それを可能にするために一番大きな助けとなるのは過去から学ぶことです。「反面教師」という言葉がありますが、私達は過去に失敗や過ちを犯した者達から同じような失敗や過ちを十分に犯しかねない者として学ぶことができます。そのことにより私達は彼らが犯した過ちを繰り返すことから免れるのです。そこで今日はその反面教師としてこのサウルというイスラエルの初代の王に目を向けたいのです。

このサウルについて聖書は彼は『若くて麗しく、イスラエルの人々のうちに彼よりも麗しい人はなく、民のだれよりも肩から上、背が高かった』（サムエル記上9章2節）と記しています。すなわちその外見だけを見ますのなら、まさしく彼は民の心を引き寄せせるものを備えていたということになります。そんなサウルにサムエルが王の任職について告げたところ、サウロはこう答えました。「わたしはイスラエルのうちの最も小さい部族のベニヤミンびとであって、わたしの一族はまたベニヤミンのどの一族よりも卑しいものではありませんか。どうしてあなたは、そのようなことをわたしに言われるのですか」（サムエル上9章21節）。サウルは自らに託されようとしていることに対してへりくだりを見せています。否、へりくだるといよりも彼は本当に自らの身分というものを思い、このように言ったのでしょうか。こうしてイスラエルは史上初めて王をその国に迎えたのです。

サウルは王位についてからまずアンモン人との最初の戦いをしました。そして、それは勝利に終わりました。この勝利により民の心は彼に近づいたと聖書は記していません（サムエル上11章1節～11節）。そうです、民はサウルのデビュー戦を見て、サウルを認め、受け入れたのです。しかし、その後が続きませんでした。サウルは

次なる敵であるペリシテ人の来襲を前に、自分に油を注いだ祭司サムエルが来て神に動物の犠牲を捧げる燔祭を待っていたのですが、約束の時になってもサムエルが来なかったため、彼はサムエルを待たずに、自分でその犠牲を捧げてしまったのです。その時の状況について聖書はこう記録しています。

**「8 サウルは、サムエルが定めたように、七日のあいだ待ったが、サムエルがギルガルにこなかったため、民は彼を離れて散って行った。9 そこでサウルは言った、「燔祭と酬恩祭をわたしの所に持ってきなさい」こうして彼は燔祭をささげた。**

(サムエル上13章8節、9節)。祭司とは神に任命されるもので、何人もその祭司の役目の代わりになることはできませんでしたので、このサウルが成したことは神様の定めを破る大きな過ちとなりました。それゆえ以後、このようにこの事は進展していきました。

**10 その燔祭をささげ終るとサムエルがきた。サウルはあいさつをしようと、彼を迎えに出た。11 その時サムエルは言った、「あなたは何をしたのですか」。サウルは言った、「民はわたしを離れて散って行き、あなたは定まった日のうちにこられないのに、ペリシテびとがミクマシに集まったのを見たので、12 わたしは、ペリシテびとが今にも、ギルガルに下ってきて、わたしを襲うかも知れないのに、わたしはまだ主の恵みを求めることをしていないと思い、やむを得ず燔祭をささげました」。13 サムエルはサウルに言った、「あなたは愚かなことをした。あなたは、あなたの神、主の命じられた命令を守らなかった。もし守ったならば、主は今あなたの王国を長くイスラエルの上に確保されたであろう。14 しかし今は、あなたの王国は続かないであろう。主は自分の心にかなう人を求めて、その人に民の君となることを命じられた。あなたが主の命じられた事を守らなかったからである」(サムエル上13章8節-14節)。**

このところから分かることは、サウルは神が定めていたことに対する恐れ(恐怖ではなく畏怖の思い)を持ち合わせていなかったということです。そうではなくサウルが恐れていたのは人間でした。サウルはペリシテ人が迫る中(彼はそれを「彼らが民を襲う」とは書かずに、「彼らが私を襲う」と書きました)、また民がそれゆえに自分から離れていくことを恐れて、サムエルを待たずに自分でできることをもって民の心をつなぎとめようとしたのです。

戦いに勝利をもたらすのは主であり、その主を恐れず、そこに信頼を置かずに人を恐れたことが彼の大きな失敗でした。そしてこの後、サムエル記上14章は後のサウルの王政を統括してこのような言葉で説明をしています**「サウルの一生の間、ペリシテびとと激しい戦いがあった。サウルは力の強い人や勇気のある人を見るごとに、それを召しかかえた」**(サムエル記上14章52節)。サムエルから宣告を受けた後もサウルは神に目を注ぐのではなくて、人を寄りどころとし続けたのです。

こんなこともありました。サウルがアマレク人と戦っている時、「アマレク人とその属するものを一切滅ぼせ」という神様の命令にサウルは従わず、敵の王アガグを生け捕りとし、羊と牛の最もよいもの、肥えたものならびに小羊とすべてのよいものを惜しんで残し、価値のないものだけを滅ぼしました。これらのことに対して・・・

10 その時、主の言葉がサムエルに臨んだ、11 「わたしはサウルを王としたことを悔いる。彼がそむいて、わたしに従わず、わたしの言葉を行わなかったからである」。サムエルは怒って、夜通し、主に呼ばわった。12 そして朝サウルに会うため、早く起きたが、サムエルに告げる人があった、「サウルはカルメルにきて、自分のために戦勝記念碑を建て、身をかえして進み、ギルガルへ下って行きました」。13 サムエルがサウルのもとへ来ると、サウルは彼に言った、「どうぞ、主があなたを祝福されますように。わたしは主の言葉を実行しました」（サムエル上15章10節－13節）。

サウルを訪ねたサムエルに対して、自分のために戦勝記念碑を建てたサウルは「わたしは主の言葉を実行しました」と嘘偽りを語ります。しかし、サムエルは問います「それならば、わたしの耳にはいる、この羊の声とわたしの聞く牛の声は、いったい、なんですか」（サムエル記上15章14節）。サウルは言います「人々がアマレクびとの所から引いてきたのです。民はあなたの神、主にささげるために、羊と牛の最も良いものを残したのです。そのほかは、われわれが滅ぼし尽しました」（サムエル記上15章15節）。

サウルはこのことは自分がしたことではなく民がしたことであり、その残した良いものは主に捧げるために残したと言うのです。「自分の力を誇示すること」、「嘘偽りを言うこと」、「民に責任を転嫁すること」、「自己正当化すること」、これらを並べ立てたサウルに対してサムエルは言います「主はそのみ言葉に聞き従う事を喜ばれるように、燔祭や犠牲を喜ばれるであろうか。見よ、従うことは犠牲にまさり、聞くことは雄羊の脂肪にまさる」（サムエル上15章22節）。

こうしてサムエルはサウルが主の言葉を捨てたので、神も彼を捨て、王位から退けられると再度、宣告します。それを聞いたサウルはサムエルに願います。「わたしは主の命令とあなたの言葉にそむいて罪を犯しました。民を恐れて、その声に従ったからです。25 どうぞ、今わたしの罪をゆるし、わたしと一緒に帰って、主を拝ませてください」（サムエル上15章24節、25節）。しかし、サムエルはもはやサウルのこの願いを聞くことをしません。こうしてその場を去ろうとするサムエルの上着をサウルが掴んだところ、それは裂けてしまいます。その時にさらにサウルは言うのです。「わたしは罪を犯しましたが、どうぞ、民の長老たち、およ

**びイスラエルの前で、わたしを尊び、わたしと一緒に帰って、あなたの神、主を拝ませてください」**（サムエル上15章30節）。

サウルがその最後にサムエルにしがみついて願い求めたことはやはり人を恐れて「自分の面子」を守ることでありました。これらのことにより、サウルの上に神の御手はもはやなく、彼はしばらくその王座に留まりますが、その毎日は彼に代わって油を注がれ、神様に用いられていくダビデへの嫉妬（サムエル記上18章6節-9節）と恐れ（サムエル記上18章12節）、最後には悪霊が彼に臨み（サムエル記上19章9節）、彼は息子ヨナタンと共にギルボア山で死ぬのです。

このようなサウルの人生の歩みは悲しく切実なメッセージを私達に語りかけます。すなわち、その最初に明確な神様の選びがあり、それを謙遜に受け止めたとしても、神様がその歩みを祝福してくださったとしても、後の日々をどう生きるかということは私達一人一人にかかっているということでもあります。神様は私達に命を与え、その前には真っ新たな人生が各々、与えられています。そして、その人生は私達の采配を託されています。神様は私達の人生に確かに介入してくださいます。しかし、私達は神のロボットとして作られてはおりませんから、私達の思いと決断、私達の言動が神の御手と共にたらいで私達の人生はかたち作られていくのです（そうであっても時に私達は自分の願い通りにならなければ、それを神の落ち度とするのです）。

サウルの場合、彼が主の言葉に聴従しなかったこと、すなわちその言葉を聴いておりながら、神ではなく人を恐れて、自分を誇り、責任を転嫁したところに問題はありました。私達はこのような先人の歩んだ人生から自らの生き方を点検することができるのです。

サウルは神を見ないで人を見ました。サムエルが燔祭を捧げるべくやってこないののでイスラエルの民が彼の元を去り始めたこと、サウルはこのことに焦りました。またペリシテ人がすぐ側まで迫っていること、そのことにもサウルは焦りました。そして、神の存在を脇に置いたのです。

サウルは民に責任を転嫁しました。アマレクとの戦いでサウルはそこにあつたものを全て滅ぼすようにという命を神様から受けていました。しかし、それらは滅ぼされることなく、そのまま残されたのです。そして、それを残したのは、それを持参してきたのは自分ではないということを強調するかのようにして「それは民がしたことだ」と彼は言ったのです。たとえそうであったとしても王としてのサウルの責任は民が残したものを滅ぼし尽くすことであったに違いありません。しかし、彼はそれをしませんでした。

私達はこう思うかもしれません。確かにサウルは神の示されることをしなかった。でも、それはそんなに取り立てて大きなことではないのではないかと。民が立ち去っていかうとしているのだから、敵がすぐ側まで迫っているのだから、家畜だって残して置けば後で色々役立つのだから……。私達もそう思わないわけでもありません。しかし、それは私達の思いであり、主の私達に対する思いは違うのです。まさしくそれはサウルがサムエルに言われた言葉に示されているのです「**主はそのみ言葉に聞き従う事を喜ばれるように、燔祭や犠牲を喜ばれるであろうか。見よ、従うことは犠牲にまさり、聞くことは雄羊の脂肪にまさる**（サムエル上15章16節-22節）。

神様は私達が神様に従うことを喜ばれます。そして一見、神様が喜ばれるから我々はとにかく神の言われることに従わなければならないのかというようにも思えてきます。有無を言わせない理不尽な一方的な命令に思われることもあるのです。

しかし、よくよく考えてみましょう。私達は恐れ多き者だということを。私達の恐れは多岐にわたりますが、その中で最たるものは人を恐れることではないでしょうか。しかし、そもそもその人とは何でしょうか。聖書を読んで私達がつ人間に関する結論は、人とはかくも不完全であるということです。この場合、それは自分以外の者達を指しているのではなく、自分自身を筆頭に私達は不完全な者なのです。その不完全な者が不完全な者を恐れるということは私達の生涯にとりまして、私達の行く手をはばむ障害となり、私達の足かせとはならないでしょうか。人を恐れずに、神を畏れなさいということ、私達が生きた方をするにより、初めて私達は真の自由を得ることができるようではないでしょうか。人を恐れず、神を畏れて生きること、それはまさしく神様が私達に与えようとされている勝利の人生のことをいうのです。

アマレクが所有していた者を残しておこうという思い、私達にも理解できます。今や英語の辞書にも残されているようですが、「もったいない・MOTTAINAI」ですもの。しかし、そのもったいないが時に私達の足かせとなっています。ある学者はここでアマレクの家畜だけではなく、彼らは高価に思われる調度品のようなものも当然、滅ぼさずに残しておいたであろうと書いています。そして、その高価に思われる調度品の中にはアマレクが拝していた偶像の神々の彫像のようなものも含まれていたに違いないというのです。確かにそれはおおいにあり得る話です。神様はよくお分かりなのです。「ちょっとだけだから」「ほんの少しだけ」「これぐらい」が後に私達に与える影響というものを。私達の間で起きる大きな問題は、大抵、「これぐらいのことと思われる」ことから始まっていることを私達は知っているではありませんか。多くの人生の分かれ道は劇的な出来事から始まるのではなく、「これぐらいじゃない」というところから始まるのです。

## 2016年5月15日 「同じ過ちを繰り返さないために」

主がイスラエルの民に命じたのは神が自らに聴き従う民の姿を望まれたということだけではなく、その命令の中に民に対する保護と愛が込められていたということなのです。その神の愛の命に聞くことがない者達がどのような道を歩まなければならなくなるかということを知りも知らぬお方、それが神様ご自身なのです。

最初に申しあげましたようにサウルにとって不本意なことでしょうが彼は私達の反面教師です。私達は彼を非難するのではなくて、同じ人として彼が陥ったことに私達も陥る可能性があるということをまず認め、しかし、彼がなした過ちを繰り返すことがないように心を整えましょう。

今、何かを恐れている方いますか。その恐れの対象は何ですか。人ですか。もし人であるのなら、なぜその人が自分に恐れを与えているのか考えてみましょう。そして、その恐れる人と神を並べてみましょう。その時、気がつきませんか。はたして自分は何を恐れているのだろうか。自分は人を恐れるあまり、神様の存在を忘れていたと。私達が本当に畏れるべき対象は神だけであるということ。

「これぐらいのこと」という思いで何かを始めている方がおりましたら、ここでもう一度、そのことを考えませんか。サウルの失敗から教訓を得ましょう。「責任を転嫁している」自分の姿が示されたら、その事実を受け止め悔い改め、神の助けを求めましょう。多くの人に祈られ、支えられ、神様の祝福によって成されたことであるのに自らを誇示しているようなことがあるのでしたら、主の前に頭を下げ、主に私達の家族や友人に感謝しましょう。栄光を主に返ししましょう。

このように考えていきますとお気づきになりますでしょう。これらのことは私達が主にあってさいわいな生涯を送るために必要不可欠なものであることを。主はサウルを祝福するために、彼を保護するために彼が聞き従うべきことを彼に与えておられたということ。サウルと同じ過ちを繰り返さないために、私達はこのお方に聞き従うのです。お祈りしましょう。